

『古今和歌集』における過去表現

山本博子

要 旨

本稿では、『古今和歌集』における過去表現について検討した。本稿において、過去表現とは、過去の助動詞「き」、完了の助動詞「ぬ」と過去の助動詞「き」の複合形式「にき」、完了の助動詞「つ」と過去の助動詞「き」の複合形式「てき」を指す。

平安時代の時間表現についてはすでに様々な議論が重ねられてきたが、資料や用例の扱い方においては各研究によって様々であった。したがって、本稿では、平安時代の言葉の実態をさらに詳細に解明していくための試みとして、用例を『古今和歌集』の和歌のみに限定して検討を行なった。

その結果、動詞の分布状況やアスペクト的意味・空間的意味において、平安時代の物語作品の会話文における用法と大きな違いがないことがわかった。したがって、アスペクト的意味や空間的意味について検討する場合は、基本的には、同時代の物語の会話文と和歌の例を同等に扱ってもよいということを示すことができた。

しかし、一人称移動動詞の例については、物語の会話文と和歌において同様の傾向が見られなかった。このことから、動詞によっては、自分の気持ちや状況を表すことが多い和歌と、自分の行動について取り上げることも多い物語の会話文とで、用法の違いが見られることを示唆することができた。

I はじめに

本稿は、『古今和歌集』における過去表現について検討するものである。

平安時代の時間表現については、すでに様々な議論が重ねられてきた。しかし、資料として物語作品を用い、地の文と会話文とを分けてそれぞれにおける機能の違いを論じるものもあれば、資料として物語作品と和歌集を用い、物語の会話文と和歌の言葉を隔てなく扱うものもあるなど、用例の扱い方においては各研究によって異なる。

しかし、井島（2011）において指摘されているように、平安時代の言葉の実態をさらに詳細に解明していくためには、物語作品と和歌集とで用いられる表現の相違点・共通点を明らかにするべきであろう。以下、井島（2011）が会話文特有の表現と言われるハベリとナムの和歌集における使用について言及したうえで、和歌と物語の地の文の言葉に対する考えを述べている箇所を引用する。

和歌に目を転じたい。まず詞書と左注の違いについて見てみると、『古今和歌集』の詞書と左注

とでは、まったく異なった表現が用いられていた。詞書にはハベリは用いられるがナムは用いられることなく、左注にはナムは用いられるが（正確には左注の地の文には）ハベリは用いられることがない。これは、詞書は編纂者（紀貫之ら）の奏覧する相手である醍醐天皇に直接語りかける会話文の表現が用いられているからであると思われる。ここでナムが用いられていないのは、ナムの持つ僭越な印象（ナムの特徴②¹）が天皇に奏覧する体裁として相応しくなかったためであると思われる。それに対して、左注は一般的な読者を想定して、物語の地の文と同じ表現が用いられているものと考えられる。

和歌そのものには、ハベリもナムもともに用いられることはない。しかしこのことは、和歌に地の文の表現が用いられているという結論に直結するわけではないだろう。むしろ、和歌が自己完結した世界を構成するものであって、対他的なコミュニケーションを目的とするものではないことと関わっているものと思われる。和歌に用いられる表現に関しては、また改めて論じたい。

傍線は本稿執筆者によるものである。(P126)

本稿では、物語作品と和歌集とで用いられる表現の相違点・共通点を明らかにする試みとして、『古今和歌集』の和歌における過去表現を調査し、物語の会話文における過去表現と用法の違いが認められるのか否かを検討したい。過去表現とは、具体的には、過去の助動詞「き」、完了の助動詞「ぬ」と過去の助動詞「き」の複合形式「にき」、完了の助動詞「つ」と過去の助動詞「き」の複合形式「てき」を指す。完了の助動詞「たり」「り」と過去の助動詞「き」の複合形式「たりき」「りき」の例は、『古今和歌集』では見られなかったため、検討対象としない。また、本稿では、助動詞やその複合形式を動詞の語形とみなすことから、これらをキ形・ニキ形・テキ形と呼ぶ。

II 先行研究

『古今和歌集』の検討に入る前に、平安時代の過去表現についての先行研究を概観することにより、その問題点について確認したい。

小田（2015）は、奈良時代から室町時代の文学作品を資料とし、古典文法について具体的な例を挙げながら包括的に記述している。そのため、和歌集・物語作品・日記の例が区別されずに示されている。また、以下のように、形容詞の過去形式と動詞の過去形式、単独形式「き」と複合形式「たりき」を区別することなく扱っている。古典文法の全体像を把握するために幅広く一括して用例を扱うことにも意味があるが、その一方で、資料や品詞、形式等の個別の使用実態を検討することも必要であろう。

「過去の時点における過去」を表す特別な言語形式はない。例えば(1)では「菊が多く咲いていたくその菊を求めにやったくその菊を送ってきた」（「A < B」はAがBより時間的に先行することを表す）という時間軸になるが、これらの過去時制はすべて「き」で表される。

(1) ある所に菊の多かりし [ヲ] 請ひにやりたりし [ヲ] おこせたりしに（経衡集・詞書）

(2) つらかりし多くの年は忘られて一夜の夢をあはれとぞ見し（新古今 1162）

(P150)

井島 (2011) は、「にたり」「たりつ」などの完了の助動詞の相互承接の状況については検討を試みているが、完了の助動詞と過去の助動詞の複合形式については論じていない。そして、以下のように、「キ」について検討している際に引用する用例のなかに、「過ぎはべりにしかば」「亡くなりはべりにし」とニキ形の用例が入っているものの他の「キ」の例と同じように「キ」の部分にのみ二重傍線が引かれていることから、ニキ形とキ形を区別していないことがわかる。(以下の引用のなかで、「にき」の部分のみを本稿執筆者が四角で囲った。)

次に会話文のキについて検討したい。会話文中において、キは一貫して発話時現在 (= 物語時現在) 以前の出来事に言及する際に用いられる。たとえば、(8)a で左馬頭が以前に通った女性のことを語っており、(8)b では僧都が源氏に紫の上の母である按察大納言の娘の経歴について語っている。会話文中で過去のことに言及する場合、実際に経験したことである場合が多いであろうが、それは単に相関性が高いというだけであり、キに“経験”あるいは“目睹”といった意味があると考えることは間違っているだろう。

(8)a 左馬頭→源氏たち「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み走り書き、かい弾く爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず見聞きわたりはべりき。見るめも事もなくはべりしかば、このさがな者をうちとけたる方にて、時々隠ろへ見はべりしほどは、こよなく心とまりはべりき。…」

帚木 一・153

(8)b 僧都→源氏「(按察大納言に) むすめただ一人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべりぬらん。故大納言、内裏に奉らむなど、かしこういつきはべりしを、その本意のごくもものしはべらで、過ぎはべりにしかば、ただこの尼君ひとりもてあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿宮なむ、忍びて語らひつきたまへりけるを、もと北の方、やむごとくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん、亡くなりはべりにし。もの思ひに病づくものと、目に近く見たまへし」など申したまふ。

若紫 一・287

(P48~49)

一方、鈴木泰 (2009) は、平安時代の物語作品と日記を資料とし、会話文のキ形・ニキ形・テキ形の違いについて検討をし、その違いについて述べている。そして、以下のように、キ形とテキ・ニキ形には「積極的に」運動が完成したことを表すか否かなどにおいて違いあることを指摘している。しかし、何をもって「積極的」とするのか、「積極的」の定義を明確にしたうえで論じる必要があると思われる。

テキ・ニキ形の基本的な意味は、キ形にたいして、ある運動を非分割的に提示するものであるということである。キ形においては、〈具体的過程の意味〉は積極的に継続的意味を表わし、〈一般的事実の意味〉は、そこに完成的意味を見ることができるときもあるが、運動を非分割的にさしだす意味を積極的にはもってはいないといえる。これにたいして、テキ・ニキ形の〈具体的事実の意味〉の場合は、運動の完成したことが積極的に表現されている。つまり、キ形の〈具体的過程の意味〉の場合には、過去のある時点において運動がまだおわっていないことが積極的に表わされているわけだから、テキ・ニキ形によって表わされる完成相と対立こそするが、競合することはない。しかし、〈一般的事実の意味〉の場合は、積極的に完成性が表わされていなくとも、完成的な運動をさししめず場合もあり、完成相との境界は曖昧である。

傍線は本稿執筆者によるものである。(P399)

山本(2000)では、平安時代の物語作品を資料とし、会話文のキ形とニキ形・テキ形のアスペクト²的意味の違いについて検討し、以下のような例を挙げ、「基本的に、キ形は現在からきりはなされたアオリスト的過去を表し、ニキ形・テキ形は現在と関わりのあるパーフェクト的過去を表すという違い」があることを指摘している。(Aはキ形の例、Bはニキ形の例、Cはテキ形の例である。A・B・Cは、本稿引用のために便宜的に付した記号であるが、傍線や〔 〕の現代語訳は山本(2000)の通りである。)

Aをかしき手ひとつなど、すこし弾き給ひて、「あはれ、いとめづらかなる音に掻き鳴らし給ひしはや。この御琴にもこもりて侍らむかし。……」と宣へば、

〔夕霧は、美しい演奏を少し試みて「ああ、柏木はすばらしい音を奏でていましたね。この琴にも、あの音がこもっているのでしょうか」などと一条御息所に言う〕

(『源氏物語』横笛 七・六三)

B「いでや、聞えてもかひなし。御方は早う亡せ給ひにき」と言ふまゝに、三人むせかへり、いとむつかしくせきかねたり。

〔右近が、「申し上げてもどうにもなりません。御方(夕顔)はすでに亡くなっています」と言うと、その場にいた三人ともむせかえり、涙を押さえかねている〕

(『源氏物語』玉葛 四・一三三)

C「中務の宮の姫君に、その夜の事を語り聞えさせしを、やがてそのまゝに絵に書き給へりし。みこの御容貌はうるはしく、めでたくて、いとうこそ似たりしか。「大将の御有様ぞ、筆及ぶべうもなき」とて、果ては破り給てき」など語れば、三の宮とおほえ給、少し起きあがりて、「その絵を、など見せざりける。心憂かりけり」と恨み給けはひ、幼びて、ふくらかに愛敬づき、愛しげに見え給ふ。

〔ある女房が「中務の宮の姫君に、天稚御子が天降りした夜のことをお話ししたところ、すぐに絵に描かれました。御子の御容貌は、美しくすばらしくて、とてもよく似ていました。『狭衣大

将の美しい様子を、筆が及ぶはずがありません』と言って、最後には破ってしまいました』などと語ると、三の宮と思われる方が、少し起き上がって「その絵をどうして見せなかったのですか。残念です」と恨んでいる様子は、幼くふっくらとしてかわいらしい]

(『狭衣物語』二・一二七)

また、山本(2010)では、平安時代の物語作品を資料とし、会話文のキ形とニキ形における空間的意味の違いについて検討し、以下のような例を挙げ、「三人称・二人称のニキ形をみることにより、過去において移動動作の主体が話し手の前からいなくなったという消失の意味を表すという特徴があることが確認できた。」(P294)と述べている。以下の例の(1)はニキ形が第三者の移動動作を表している例であり、(2)は、ニキ形が話し相手の過去の移動動作について問題にしている例である。

(1)「ここにおはしましし人は、はやものへおはしにき」とて、(『平中物語』 p.523)³

(2) ……見つけ給ひて、「昨日は、など、いととくは、まかでにし。いつ参りつるぞ」など宣ふ。

(『源氏物語』紅梅 p.46)⁴

(1)は、宿守が「ここにいらっしゃった方はよそへ行かれました。」と使者に伝えている場面である。(2)は、匂宮が若君(大納言と真木柱の息子)に、「昨日はどうして早く帰ったのか。今日はいつ参ったのか。」などと言っている場面である。

山本(2000・2010)では、対象とする用例を限定して検討することにより、物語作品の会話文における過去表現についての詳細を明らかにしている。しかし、先にも述べたように、平安時代の言葉の実態をさらに詳細に解明していくためには、物語作品だけでなく和歌集で用いられる過去表現についても検討を試みる必要があると考える。

本稿では、山本(2000・2010)で見られた違いが、『古今和歌集』においても認められるかという点に主眼を置き、検討を進めていきたい。

Ⅲ 『古今和歌集』におけるキ形・ニキ形・テキ形

本章では、『古今和歌集』のキ形・ニキ形・テキ形の用例を具体的に分類・検討していくことにより、どのような使い分けがなされているのかを明らかにする。なお、本稿では、終止形・連体形の用例を収集し、特に区別することなく扱う。土岐(2010)で言及されている終止形終止と連体形終止の違いが、和歌においても認められるのかという点については改めて検討したい。⁵

以下では、まず、『古今和歌集』におけるキ形・ニキ形・テキ形の動詞の分布状況を示す。次に、具体的な用例を挙げながら、キ形・ニキ形・テキ形のアスペクト的意味の違い・空間的意味の違いについて明らかにする。

1、動詞の違い

アスペクトの意味や空間の意味は、動詞が運動を表すのか状態を表すのか、さらには運動を表す場合は限界性のない動作動詞なのか、限界性のある変化動詞なのかという点等と大いに関わる。そのため、具体的な用例の検討に入る前に、動詞の分布状況を確認する。

以下の動詞のA類～H類の分類⁶に、各形式が何例ずつあるのかを表1に示す。

A類～H類のどのような動詞がそれぞれの語形に見られたのかについては、末尾に付した【資料】を参照されたい。

【動詞の意味分類】

A 主体動作客体変化動詞

：客体の変化に向かって働きかけていく能動的 = 意志的主体の動作を表す動詞<他動詞>⁷

B 主体 (= 人) 動作動詞

：(1) 客体に向かって働きかけていく能動的 = 意志的主体の動作を表すが、客体の変化は捉えていない動詞<他動詞>

(2) 能動的主体 (人) の動作を表す動詞<自動詞>

C 主体変化動詞

：基本的には物の自然発生的 = 無意志的な変化を表す動詞<自動詞>

D 主体 (= 人) 動作主体変化動詞

：能動的 = 意志的主体の自らに変化をもたらす動作を表す動詞

(1) 客体に働きかけていくことが主体に変化をもたらす動詞<他動詞>

(2) 主体に変化をもたらす動作を表す動詞<自動詞>

E 主体 (= 物) 動作動詞

：物の自然発生的 = 無意志的な動き、現象を表す動詞<自動詞>

F かかわり動詞

：心理的なかかわりや態度を表す動詞<他動詞・自動詞>

G 動作相動詞

：複合動詞形式や機能動詞的關係を作って様々な動作態や局面性を表す動詞<他動詞・自動詞>

H 状態動詞

：存在や特徴を表す動詞<自動詞>

表1：『古今和歌集』におけるキ形・ニキ形・テキ形の動詞の分布状況

	A	B	C	D	E	F	G	H	合計
キ形	9 (11%)	22 (28%)	5 (6%)	11 (14%)	1 (1%)	12 (15%)	11 (14%)	9 (11%)	80 (100%)
ニキ形	0 (0%)	1 (3%)	17 (61%)	5 (18%)	2 (7%)	3 (11%)	0 (0%)	0 (0%)	28 (100%)
テキ形	2 (20%)	4 (40%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (10%)	1 (10%)	2 (20%)	0 (0%)	10 (100%)

ニキ形・テキ形ともに、用例が少ないものの、ニキ形はその8割近くがC類・D類の主体変化動詞であり、テキ形はその7割がA類・B類・E類の主体動作動詞であることがわかる。一方、キ形は、ややB類の主体動作動詞が多いものの、満遍なく各種の動詞をとっていることがわかる。このことは、ニキ形・テキ形が特定のアスペクト的意味を持つのに対し、キ形が特定のアスペクト的意味を持たないことを示唆していると言える。また、H類の状態動詞がキ形にのみ見られることから、ニキ形・テキ形は人や物の動きを表す形式であり、キ形は人や物の動きも人や物の状態をも表す形式であることがわかる。

また、この分布状況は、以下のように山本（2000）で検討した物語作品（『宇津保物語』『落窪物語』『源氏物語』『狭衣物語』）の会話文のキ形・ニキ形・テキ形の終止形における傾向と同様である。

なお、『古今和歌集』においても、物語作品においても、G類の動作相動詞の割合が、キ形・ニキ形よりもテキ形に多いという傾向が認められた。興味深い傾向であるが、なぜテキ形に「～そむ」などの動作相動詞が見られるのかという点については、別稿にて改めて検討したい。

表2：物語作品の会話文におけるキ形・ニキ形・テキ形の動詞の分布状況

	A	B	C	D	E	F	G	H	合計
キ形	15 (3%)	196 (37%)	12 (2%)	20 (4%)	6 (1%)	116 (22%)	34 (6%)	132 (25%)	531 (100%)
ニキ形	2 (2%)	4 (3%)	78 (62%)	28 (22%)	0 (0%)	11 (9%)	1 (1%)	1 (1%)	125 (100%)
テキ形	8 (29%)	10 (36%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (3%)	3 (11%)	6 (21%)	0 (0%)	28 (100%)

() 内の割合は、本稿において加筆した。

2、キ形・ニキ形・テキ形の特徴的な意味

ここでは、1の動詞の分類を踏まえたうえで、具体的な例を挙げながら、『古今和歌集』におけるキ形・ニキ形・テキ形の傾向の違いについて検討する。

2-1 アスペクト的意味の違い①固有の動詞を通して

1で明らかにしたように、キ形・ニキ形・テキ形には、動詞の分布状況において違いが見られた。本節では、キ形のみまたはニキ形のみには認められない動詞の例を見ることにより、それぞれのアスペクト的意味の特徴を具体的に示したい。テキ形については、合計用例数が少なく、テキ形には認められない動詞がまとまった数にならなかったため、本節では検討対象としない。

H類に分類される「あり」と「見ゆ」は、キ形には認められなかった。

「あり」は6例あったが、そのうちの4例を以下に示す。

- ①梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる（春歌上 35）
- ②いにしへにありきあらずは知らねどもちとせのためし君にはじめむ（賀歌 353）
- ③忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ恋しき（恋歌4 718）
- ④いにしへの倭文の苧環いやしきもよきも盛りはありしものなり（雑歌上 888）

傍線は本稿執筆者によるものである。以下に掲載の用例についても同様である。

①は「梅の花のそばにほんの立ち寄る程度にいただけなのに、人がおかしいと咎めるほどに花の香りが染みついてしまった。」、②は「昔あったかなかったかは知りませんが、千歳という長寿の例を親王様をもってはじめといたしましょう。」、③は「もうあの人のことは忘れてしまおうと思ったとたんに、今まであった恋心よりも増して、一段と恋しい気持ちが何より先に起きてくる。」、④は「昔の倭文織ずおり おだまきの苧環には麻糸を巻くが、いやしい人にも尊い人にも同じように盛りの頃があったのだ。」と、現代語で解釈すると「いる」「ある」と異なる動詞が当てはまるが、どの例も、人や物事や気持ちの具体的な動きを表しているのではなく、それらの過去における存在について問題にしている。

「見ゆ」は、以下の3例が見られた。

- ⑤春日野の雪間をわけて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも（恋歌1 478）
- ⑥白玉と見えし涙も年ふれば韓紅にうつろひにけり（恋歌2 599）
- ⑦有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかり憂きものはなし（恋歌3 625）

⑤～⑦は、⑤「春日野の雪の間を分けて萌え出てくる若草が、かすかに姿を現すように、ほんのわずかに姿が見えたあなたであったよ。」、⑥「はじめは白玉のように見えた涙も、年月が経つと真っ赤な色に変わってしまったことよ。」、⑦「有明の月が無情に見えた別れの時から、私にとって明け方はどつらいものはない。」と解釈でき、やはり具体的な動作を表しているのではなく、人や物が自分にとってどのように映ったのか、どのように存在していたのかを表している。

①～⑦のような例がニキ形・テキ形に見られないことから、ニキ形・テキ形が、存在や状態を表すのではなく、具体的な動作や変化を表すことを確認することができる。

それでは、ニキ形は、どのような具体的な動作や変化を表すのか、ニキ形のみに見られる動詞を見

ることにより確認したい。C類の動詞「なる」と「ふる」は、ニキ形にしか認められなかった。「なる」6例のうち4例を以下に示す。

- ⑧ふるさととなりにしならの都にも色は変らず花は咲きけり（春歌下 90）
- ⑨よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき（恋歌3 619）
- ⑩たれ見よと花咲けるらむ白雲の立つ野と早くなりにしものを（哀傷歌 856）
- ⑪われを君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき（雑歌下 973）

「なる」は人や物の変化を表す動詞であり、⑧「旧都となつてしまった奈良の都にも、色は変らずに花は咲くのであった。」、⑨「あなたのそばに身を寄せるところがないので、身体は遠く離れているけれども、私の心はあなたに寄り添う影となりました。」、⑩「いったい誰に見てほしいと言って花は咲いているのであろうか。白雲の立つ寂しい野に早くもなつてしまったのに。」、⑪「私のことをあなたは何とも思ってくれず、私は難波の浦にいたので、つらい目を見て三津寺で尼になつてしまいました。」と、過去に変化が起きその結果によって生じている現在の状態についての感慨が歌に詠まれている。

「ふる」は、以下の4例が見られた。

- ⑫里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる（秋歌上 248）
- ⑬花の木にあらざらめども咲きにけりふりにしこのみなるときもがな（物名 445）
- ⑭日の光やぶしわかねば石上ふりにし里に花も咲きけり（雑歌上 870）
- ⑮いそのかみ古りにし恋の神さびてたたるにわれは寝ぞ寝かねつる（雑躰 1022）

この4例の和歌も、⑫は「里は荒れて、住む人が年老いてしまった宿だからでしょうか。庭も垣根も区別なく一様に秋の野となっています。」、⑬は「花の咲く木ではないようだけれども、花が咲いたことよ。同じように、年老いた我が身も世に出る時期があつてほしい。」、⑭は「日の光は藪を分け隔てしないで降り注ぐものだから、古くなって荒れた里にも花は咲くのだな。」、⑮は「年を経てすっかり古くなった恋が、神のようになって祟りをなすので、私はとても寝られないのだった。」と、「ふる」という変化の結果の状態を踏まえたうえで、現在の光景や心境・状況について詠まれている。

⑧～⑮の例を見ることにより、ニキ形が過去に起きた変化と現在における変化の結果の状態を表すことがわかる。

このようなニキ形の特徴を確認することにより、ニキ形だけに2例見られたE類の動詞「吹く」の例が、なぜニキ形であるのかということも説明することができる。

- ⑯秋風の吹きにし日よりひさかたの天の河原に立たぬ日はなし（秋歌上 173）
- ⑰秋風の吹きにし日より音羽山峰のこずゑも色づきにけり（秋歌下 256）

ニキ形は、8割近くが主体変化動詞であるため、主体（＝物）動作動詞の「吹く」は一見異例に見える。しかし、⑬は「秋風の吹いた日から（立秋の日から）天の川の河原に立たない日はない。」、⑭は「秋風の吹いた日から（立秋の日から）音羽山の峰の梢も色づいたことだな。」という意味であり、これらの「吹く」が一回的・一時的な現象として取り上げられているのではなく、季節の変化の象徴として取り上げられていることがわかる。したがって、秋風が吹いた日つまり秋が始まった日から、一定の期間続く秋という季節のなかにおける自分の行動や景色の変化について詠まれており、⑧～⑬と同様に、「吹きにし」が過去における変化と現在の変化の結果の状態を表していると言える。

2-2 アスペクト的意味の違い②共通の動詞を通して

2-1では、キ形・ニキ形のそれぞれにしか認められない動詞の例を見ることにより、それぞれの特徴的なアスペクト的意味を示した。ここでは、共通した動詞におけるキ形・ニキ形、キ形・テキ形の例にも目を向けることにより、何らかの特徴の違いが認められるのかを探りたい。

以下のB類の動詞「別る」のキ形とニキ形の例のように、その違いを認めることが難しい例もあった。

⑬ほととぎすけさ鳴く声におどろけば君を別れし時にぞありける（哀傷歌 849）

⑭ほととぎす鳴く声きけば別れにしふるさとさへぞ恋しかりける（夏歌 146）

⑬は「ほととぎすが今朝鳴いた声にはつとすると、ちょうど去年あなたとお別れした時分なのでした。」、⑭は「ほととぎすの鳴く声を聞くと、離れたふるさとまでも恋しく思えるのだ。」であり、ほととぎすの鳴き声を聞いたことによって、恋人と別れた時や離れた故郷のことを思い出している。⑬では別れた結果として現在あなたとはいえない状態であり、⑭ではふるさとから離れて現在も離れている状態であり、両例とも現在とは切り離して捉えることのできない過去の動作を取り上げており、アスペクト的意味において違いを見出すことは難しい。

しかし、以下のような例からは、テキ形は、キ形よりも現在と関わりのある過去の行為を取り上げる傾向があることを認めることができる。

以下は、B類の動詞「見る」のキ形とテキ形の例である。「見る」はキ形に9例、テキ形に2例見られた。

⑯よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり（春歌上 37）

⑰うつせみの世にも似たるか花桜咲くと見しまにかつ散りにけり（春歌下 73）

⑱みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける（秋歌上 245）

⑯～⑱はキ形の「見る」の例である。⑯は「遠くから美しいと見ていた梅の花よ、満足することのないその色香の魅力は、折ってはじめて感じられるものだ。」、⑰が「はかないこの世にも似ているな

あ花桜は。咲いたと思って見ていた間に散ってしまうのだ。」、⑳は「緑色の同じ草だと春は見て思っていたが、秋は色とりどりの花を咲かせたことだ。」という解釈ができる。3例とも、「見る」という過去の動作が現在の状況に直接的に結果や影響を及ぼしてはいない。むしろ、㉑では、見ていた梅の花を折ってその色香に魅了されていること、㉒では、見ていた桜が散ってしまったこと、つまりもう見ることはできないこと、㉓では、緑色だと見ていた草が緑色ではなかったことが述べられており、「見る」は、現在の心境や状況とは切り離された前段階の動作として取り上げられている。

それに対し、以下のテキ形は、過去における「見る」という行為がきっかけとなり、現在人を恋しく思う気持ちや、夢をあてにする気持ちが強くあることが表されている。

㉔山桜霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ (恋歌1 479)

㉕うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき (恋歌2 553)

㉔は「山桜を霞の間からほのかに見るように、ほのかに見た人が本当に恋しい。」、㉕は「うたた寝をしている時に恋しい人を夢に見てから、夢というものをあてにするようになった。」と解釈でき、過去の「見る」という動作が、現在の状況と切り離して捉えられているのではなく、現在恋心を抱いている対象についての説明、現在の心境の要因となった出来事として取り上げられている。

次に、A類の動詞「染む」のキ形とテキ形の例を比べてみたい。

㉖色もなき心を人に染めしよりうつろはむとは思ほえなくに (恋歌4 729)

㉗紅に染めし心もたのまれず人をあくにはうつろふなり (雑躰 1044)

㉘色なしと人や見るらむ昔より深き心に染めてしものを (雑歌上 869)

「染む」のキ形の例は上記の㉖㉗のみである。㉖は「色もない私の心をあの人によって染めてから、色が褪せてしまうとは思ってもいなかったのに。」、㉗は「紅に染めた心もあてにはできない。人に飽きるというくあく(灰汁)で洗うと紅が褪せるということだ。」という意味である。「染む」は、主体動作客体変化動詞であるため、動作の結果の状態もある程度は捉えている動詞だと言える。しかし、㉖㉗は、染めた後の「色が褪せる」という次の段階に移ってしまったことへの感慨を歌っており、「染む」は現在の状況から切り離された過去の動作として取り上げられていることがわかる。

一方、㉘のテキ形に1例のみ見られた「染む」の例は、「何も色がついていないとあなたは思っているのでしょうか。昔から深い心で染めてあったものなのに。」という意味である。この「染めてし」は、過去の時点で染めたことを表しているというよりは、「昔から染めています」つまり「現在染まっています」ということを表していると解釈できる。過去における動作の完成よりも現在の動作の結果の状態に重点が置かれているという点で、㉖㉗とはアスペクト的意味における違いが認められる。

2-3 空間的意味の違い

2-1・2-2では、キ形・ニキ形・テキ形のアスペクト的意味の違いについて、固有の動詞と共通の動詞に着目して検討した。ここでは、キ形・ニキ形の移動動詞に着目し、空間的意味の違いについて分析を試みる。なお、移動動詞はテキ形には見られなかったため、キ形とニキ形のみの違いを検討する。

Ⅱ章でも述べたように、山本（2010）は、平安時代の物語作品の会話文における移動動詞を検討し、「三人称・二人称のニキ形をみることにより、過去において移動動作の主体が話し手の前からいなくなったという消失的意味を表すという特徴があることが確認できた。」(P294)としている。

ここでは、『古今和歌集』においても同様の傾向が見られるのか否かを、D類に分類される移動動詞に着目し、検討したい。『古今和歌集』には、ニキ形の三人称の移動動詞が3例しか見られなかったが、以下の3例とも、消失的意味を表しているとは解釈できた。

㉘み吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ（冬歌 327）⁸

㉙ほととぎす峰の雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき（物名 447）

㉚群鳥の立ちにしわが名いまさらにことなしふともしるしあらめや（恋歌 3 674）

㉘は「吉野山の白雪を踏み分けて山に入ってしまった人は、帰ってくるどころか便りも寄こさない。」、㉙は「ほととぎすは、峰の雲の中に紛れ込んで行ってしまったのか。いるということは声でわかるが、姿を見るすべもない。」、㉚は「群鳥が飛び立つように世間に広まった私の噂は、今更何もなかったようにふるまってみても、その甲斐があろうか、ありはしない。」と解釈でき、いずれも、作者のいる地点から人や鳥が離れたことを表している。そして、離れていった人から連絡がない、ほととぎすの姿が見られない、噂が広まっている状況であるという、過去の動作の現在における影響について詠まれている。

一方、キ形の三人称の移動動詞の3例中1例は、以下の㉛「北へ行く雁が鳴いている。一緒に連なって渡ってきた時より数が減って帰っていくようだ。」で、「来し」は動作の主体である雁が作者のいる側に来たことを示しており、㉘～㉚の消失的意味とは移動の方向性が逆の例であると言える。

㉛北へ行く雁ぞ鳴くなる連れて来し数は足らでぞ帰るべらなる（羈旅歌 412）

キ形の三人称の移動動詞の3例中2例は、以下のように動詞「往ぬ」の例であった。

㉜春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に（秋歌上 210）

㉝植ゑていにし秋田刈るまで見え来ねばけさ初雁の音にぞなきぬる（恋歌 5 776）

㉜は「春霞の彼方へかすんで去って行った雁は、今鳴いている。秋霧のうえで。」、㉝は「早苗を植えて行ってしまった人は、秋の田を刈る頃まで見えも来もしないので、今朝初雁の鳴き声を聞いたが、

同じように私も泣いてしまった。」と、2例とも作者の地点から離れていなくなったという消失的意味を表している。しかし、「往ぬ」は、完了の助動詞「ぬ」が語源だとされており、基本的に「ぬ」や「ぬ」の複合形式とは接続しない動詞である。したがって、純粋なキ形の例として扱うことができず、この2例をもって移動動詞のキ形にも消失的意味を表す例があるという根拠にはならない。

以上、用例数が少ないため傾向を確認したにすぎないが、『古今和歌集』においても、物語作品に見られたように、三人称移動動詞のニキ形が消失的意味を表す例を認めることができた。

最後に、一人称の移動動詞の用例も見ておきたい。山本（2010）では、以下のように物語の会話文におけるニキ形とキ形の一人称移動動詞の例を挙げるにより、「ニキ形は、ある場所から退出したことや離れたことを表す際に用いられるのに対し、キ形は、現在いる場所にどのような経緯で帰って来たか、やって来たかを表す際に用いられる傾向があるように捉えられた。」(P287)と述べ、一人称移動動詞のニキ形に「一人称では、ある地点から「退出した」という客観的に捉えやすい自らの移動動作を表しているという特徴が見られた。」(P294)と一人称移動動詞のキ形とは違う特徴があることを指摘している。

- (7) 松方、「はなはだかしこし。『候はむ』と思う給へしを、手番のことなど侍りしかば、それに障りてなむ、急ぎ参上りにし。……」。

(『宇津保物語』吹上・上 p.249)

このニキ形の例は、松方が「先日はもっとお邪魔していたのですが、手番のことなどがありましたので、急いで上京したのです。」などと涼に言っている場面である。「参上りにし」は、直接的には京に行ったことを表している。しかし、ここでは、京に行くという移動動作は、すなわち吹上の宮からの退出を意味している。

- (8) 少将、「はなはだかしこし。『粉河に、いささか願果たさむ』と思う給へて、紀伊国の方にまかりたりしを、あやしき人に見給へつきて、え参上り来ざりつるを、からうしてなむ、昨夜参上り来し」。

(『宇津保物語』吹上・上 p.274)

このキ形の例は、仲頼が「紀伊国に行っていたためしばらく参上できませんでしたが、昨夜ようやくこちらに戻って来ました。」などと正頼に説明している場面である。

(p.287)

しかし、『古今和歌集』においては、一人称移動動詞のキ形の6例と一人称移動動詞のニキ形の2例に明確な特徴の違いを見出すことはできなかった。

③④したはれて来にし心の身にしあれば帰るさまには道も知られず（離別歌 389）

③⑤死出の山ふもとを見てぞ帰りにしつらき人よりまづ越えじとて（恋歌5 789）

③④は、一人称移動動詞のニキ形の例である。③は「恋い慕う気持ちにまかせてここまでやって来たその心はあなたと一緒にあるので、帰りはどのように帰ればよいのか道もわかりません。」、④は「死出の山の麓を見ただけで帰ってきました。つれないあの人より先には越えるまいと思って。」と解釈でき、ニキ形は、現在いる場所にどのような経緯で来たか、帰って来たかを表している。したがって、③④のニキ形は、物語の会話文に見られたような、ある場所から退出したことや離れたことを表してはいない。

③⑥春の野に若菜つまむと来しものを散りかふ花に道はまどひぬ（春歌下 116）

③⑦ふりはへていざ故里の花見むと来しをにほひぞうつろひにける（物名 441）

一方、③⑥の一人称移動動詞のキ形も、③が「春の野に若菜を摘もうと来たのに、散りまがう花に道がわからなくなってしまった。」、⑥が「わざわざふるさとの花を見ようと来たのに、花は色あせてしまっていたことだ。」と解釈でき、③⑥のニキ形の例と同様に、現在いる場所にどのような経緯で来たのかを表している。

このように、物語に見られた一人称移動動詞のニキ形・キ形の違いが、『古今和歌集』の和歌においては認められなかった。これは、物語では、国をまたぐような大きな空間的移動について第三者に報告する場面などがあるため、自分達が現在いる場所から離れたという過去の移動動作を取り上げる機会があり、ニキ形がその移動を表す役割を担っていたのに対し、和歌では、自分の気持ちや状況を表すことが多いため、ある場所から離れたという過去の移動動作を取り上げること自体が少ないため、物語文と同様の用法が見られなかったからではないかとも考えられる。しかし、それではなぜ、和歌における一人称移動動詞にニキ形もキ形も存在するのかという疑問が残る。この問題については、『古今和歌集』以外の和歌集の用例も検討することにより改めて考えていきたい。

IV おわりに

以上、本稿では、『古今和歌集』における過去表現キ形・ニキ形・テキ形について検討した。

その結果、動詞の分布状況やアスペクト的意味・空間的意味において、平安時代の物語作品の会話文における用法と大きな違いがないことがわかった。したがって、基本的には、平安時代の時間的意味や空間的意味について検討する場合は、和歌も、同時代の物語作品の会話文と同等に扱ってもよいということを示唆することができた。しかし、Ⅲの2-3で論じたように、一人称の移動動詞の傾向においては、物語に見られた特徴が和歌では見られないという違いが見られた。今後も、和歌と物語における時間表現や空間表現の特徴の違いが認められた際には、なぜそのような違いが生じるのかという問題について検討していきたい。

また、各語形ごとに動詞の分布状況やアスペクト的意味における違いがあることも確認できたため、キ形のような単独形式と、ニキ形・テキ形のような複合形式は、平安時代の時間表現の実態を詳細に解明していくためには、個別に分析していくべきだということも示すことができた。

以下の表に、本稿で確認できた各語形の特徴を記す。

	動詞の分布状況	アスペクト的意味	空間的意味
キ形	状態動詞をとる	現在からきりはなされた過去を表す	三人称移動動詞において消失的意味を表すとは言えない
ニキ形	主体変化動詞が多い	現在と関わりのある過去を表す	三人称移動動詞において消失的意味を表す
テキ形	主体動作動詞が多い	現在と関わりのある過去を表す	(三人称移動動詞の例がない)

鈴木泰（2009）では、キ形について「積極的に完成性が表わされていなくとも、完成的な運動をさしめず場合もあり、完成相との境界は曖昧である。」としているが、これは、過去の動作の影響力の違いについての言及であると考えられる。キ形も完成的意味を表すことがあるが、現在とはきりはなされた過去の動作を表すために、過去における動作や変化の結果の状態を表し現在の心境や状況における影響力を持つニキ形・テキ形よりも、積極性がないように見えるということであろう。

本稿では、『古今和歌集』のみを検討対象としたが、今後は『古今和歌集』以降の八代集の例も検討していきたいと考えている。そうすることにより、時代が進むにつれての時間表現の変化をも明らかにしていきたい。

【資料】『古今和歌集』におけるキ形・ニキ形・テキ形をとる動詞

A 主体動作客体変化動詞

キ形 (9例)	ニキ形 (0例)	テキ形 (2例)
植う (2例)・染む (2例)・散らす・とる・綜・むすぶ・分く		染む・降りかくす

B 主体 (= 人) 動作動詞

キ形 (22例)	ニキ形 (1例)	テキ形 (4例)
あふ・言ふ・聞く (3例)・住む・寝 (3例)・経・見る (9例)・別る (3例)	別る	言ふ・過ぐす・見る (2例)

C 主体変化動詞

キ形 (5例)	ニキ形 (17例)	テキ形 (0例)
出づ・朽つ・暮る・咲く・春たつ	荒る・墮つ・枯る・絶ゆ・散る・なる (6例)・濡る・ひつ・古る (4例)	

D 主体 (= 人) 動作主体変化動詞

キ形 (11例)	ニキ形 (5例)	テキ形 (0例)
往ぬ (2例)・着る・来 (8例)	入る・帰る・来・立つ・まじる	

E 主体 (= 物) 動作動詞

キ形 (1例)	ニキ形 (2例)	テキ形 (1例)
(袖が) ふる	吹く (2例)	鳴きふるす

F かかわり動詞

キ形 (12例)	ニキ形 (3例)	テキ形 (1例)
飽く・思ふ (9例)・たのむ・待つ	思ふ・まどふ・わぶ	思ふ

G 動作相動詞

キ形 (11例)	ニキ形 (0例)	テキ形 (2例)
ありく・思ひく・咲きそむ (2例)・す (3例)・住みく・たのめく・ぬぎかく (2例)		思ひそむ・たのみそむ

H 状態動詞

キ形 (9例)	ニキ形 (0例)	テキ形 (0例)
あり (6例)・見ゆ (3例)		

【テキスト】

用例を収集する際には、『新版 古今和歌集 現代語訳付き』(2009・角川ソフィア文庫)を使用した。掲出する用例の表記等は、当該テキストに従っている。しかし、解釈については、当該テキスト以外の注釈書も随時参照している。

【主要参考文献】

- 井島正博 (2011) 『中古語過去・完了表現の研究』 ひつじ書房
 小田勝 (2015) 『実例詳解 古典文法総覧』 和泉書院
 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房
 鈴木泰 (1999) 『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』 ひつじ書房
 鈴木泰 (2009) 『古代日本語時間表現の形態論的研究』 ひつじ書房
 土岐留美江 (2010) 『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的的研究』 ひつじ書房
 山本博子 (2000) 「中古語におけるキ形とニキ形・テキ形の違い」(お茶の水女子大学国語国文学会『国文』93)
 山本博子 (2009) 「中古語におけるハベリキ形とテハベリキ形」(『日本語文法』9-1)

山本博子 (2010) 「助動詞「ぬ」の消失的意味についての一考察」(『日本語形態の諸問題—鈴木泰教授東京大学退職記念論文集』ひつじ書房)

【注】

- 1 井島 (2011) のP122では、ナムが用いられる表現の特徴について、「①必ずしも特定の聞き手を目指している必要はなく、不特定多数の聞き手あるいは読者を想定して用いられればよく、②場合によっては、どの部分が相手が知らない新情報であるかを明示することは、相手に対して僭越な態度になりかねない。」と述べている。
- 2 アスペクトとは、「運動内部の時間的展開の表示」(小田2015・P122)である。
- 3 ページ数は、山本 (2010) で資料としている新編日本古典文学全集 (小学館) のものである。
- 4 ページ数は、山本 (2010) で資料としている『源氏物語』(角川文庫ソフィア) 第8巻のものである。
- 5 土岐 (2010) は、「第3章 平安和文会話文における連体形終止文」において、「取り立てて構文的特徴も詠嘆性や解説性も見られないと考えられる連体形終止の例にも、終止形終止と比較して一定の表現性があったものとする。」という立場から、物語作品 (『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語]) の会話文中の平叙文を検討している。そして、「1. 動詞文では感情・思考・知覚動詞に多く、動作・変化動詞文の文内容内訳では具体性を持つ事柄についての現在時状況を述べるものと、既定の事柄に対する話者の発話時現在の評価や解説を表明するものが多い。」「2. 形容詞文では属性的形容詞には例がなく、情緒的形容詞に偏り、すべて「心憂し」「恐ろし」「わづらはし」などのマイナス感情を表すものに現れる。」「3. 助動詞文では①感情・思考②過去・完了③推量④否定⑤断定の順に高い。発話者の感情や思考など、情報上、発話者に絶対的優位性がある場合には高く、逆に事柄の確定権が発話者には低くなる。」ことから、「連体形終止は、発話者に当該情報の絶対的優位性があることを示す。」(P229) と結論づけている。
- 6 山本 (2009) でも同様の分類を用いた。
- 7 A類～H類の説明は、鈴木泰 (1999) における動詞の説明に従っている。